

『クレール・ルノワール』に見る神経流体

——生理学的屍霊が翹望する一者——

藤坂 龍之介

1. はじめに

現代に直接につながる近代科学が隆盛しキミアと近世科学の分離が決定的になっていた19世紀において、その当然の反作用として文学者やいやはてに科学者に至るまで精神世界における叛逆が猖獗を極めていたのは必然の結果であった。海を越えて齋された降霊術の実践はバルザックやユゴーらも等閑にすること叶わず、フランス国内においては秘密結社が蝟集し魔術師を自称する者らの間で直接的間接的に交流あるいは衝突しユイスマンスは彼らの一人と関係を持ち新たに筆をとったことは多く知られた事実である。終始対立したエジソンとテスラも双方霊界との交信を始め、クルックスはヒュームの降霊術の「事実確認」をするしかなかったように科学者もその例外ではなかった。そうした背景の中、仏国文壇の中でもとりわけ精神世界の絶対的優越を標榜したヴィリエ・ド・リラダン伯爵の脳髓から『クレール・ルノワール』(Claire Lenoir)が流出したのは時流の予言であった。

『クレール・ルノワール』は『トリビュラ・ボノメ』(Tribulat Bonhomet)の物語集の一つであり、ブルジョワ精神の持ち主である実証科学主義者ボノメ博士、オカルティズムに傾倒し自らのヘーゲル哲学を披露するルノワール博士、そしてその妻である敬虔なクリスチャンであるクレールの三者の哲学談義が

内容の殆どを占め物語の中核となっている。この登場人物三者の大学堂において無視できない要素となっているのはこのオカルティズムとカトリシズムでありこれらに接近していくことはヴィリエの思想を明らかにしていくのに避けては通れないのであるが、特に前者に関してはその本質からかなり学問の対象としては忌避されているのが実情である。

しかしヴィリエが常に自身のヒエラルキーの中において最上位に位置させていたのは敬虔なクリスチャンとしての信仰であることはレオン・ブロワや斎藤磯雄らヴィリエ研究者も認めているようにひとつポイントとして挙げておかなければならないだろう。

しかしヴィリエのそれは教条至上主義であるはずもなく様々な思想のアマルガムであり、特に神秘主義的傾向が非常に強い。しかしその一枚岩ではないかない神秘思想へといかに中心に近づいていけるかがヴィリエの思想の枢軸へと触れる一端にならないであろうか。

さて、そうしたヴィリエの神秘主義が頂点に位置することは問題ないとしても一本軸で物語を貫いているのではない。ヴィリエが好んで用いたスウェーデンボルグの言葉に「信仰の思想を凌駕せるは猶思想の本能を凌駕せるが如し」というものがあるが、その通り実際には生理学とオカルティズム、ヘーゲル哲学とキリスト教神秘主義がレシプロックに補完しあって結びつき、天使の位階がごとく上部から流出して並び立っているのである。まずは最下層に位置している生理学的要素、そしてそれに連関するオカルティズムについて、これらの分子がいかにかこの文学において反応を起し、またヴィリエの地軸にどのように攀縁しているのかをなるべく文学領域からはみ出ない程度に考察していきたい。

2. 生理学と流体

『クレール・ルノワール』の談義の冒頭でボノメ博士がルノワール博士の性格を描写する際に多数の自然哲学者や魔術師から霊媒師に科学者に至るまで列挙する場面から発して論議は霊的な様相を帯びてくるのであるが、ルノワール博士は二体の人間間、特に死者から発せられる流体に関する話へと展開していく。さて、ここでは中世古代期のそれではなく 19 世紀の実証科学の観点から語られることに注目したい。

実証科学という点において「神経流体」すなわち *«fluide nerveux»* という語は些か奇妙ではあるが、18 世紀には少なくともドゥニ・ディドロの著した *Eléments de physiologie* において人間の脳髄における神経間を満たす不断の流体として定義付けられていた。無論ディドロの時代において流体について生理学的な意味合い以外のものを見出す潮流がなかったわけではない。事実こうした潮流はおおまかに近世まで遡ることが可能である。

ヴィリエがそうした様々な時代に渡る「自然哲学者」らのうちで最も筆頭に掲げ、自身の数々の著書のうちで幾度と引用してみせているテオフラストゥス・フォン・ホーエンハイム、我々が呼ぶところのパラケルススの名で知られる人物の影響は少なくない。ヴィリエが何故この男を普段によく引用していたのかは様々な想像ができるが、双方とも由緒ある家柄の出であったこと、同時代の科学に多大な関心を抱きながらもその根底にあるのは確固としたカトリシズムであったこと、常に彼らが信じる神の御業を現世のうちに見出しながらも栄光ある最期を迎えることができなかつた点など以外に共通点は多い。

そのような性質の医者パラケルススはそれまでの宇宙と人間の二つの宇宙間のコレスポンドンスという占星術的基本観念を延長し、その二者間をつなぐミーディアムの存在を体系付けて説明した。彼は自身の「パラ」3 部作のひとつ *Volumen Paramirum* においてそのミーディアムの存在としての「空気」を神が最初に創造したすべての素材の純粹素材、のちのオカルティストらが好んで用いることになる「第一質料」として定義し医学的治療へと延長していったのである。

そうしたパラケルススの自然哲学的解釈を暗闇の中に背景として、ヴィリエの生まれる半世紀前に隆盛したメスメリズムにおいて宇宙から生理学的身体へと場所を移していくのであるが、この時点では生者間における医学実験にすぎなかったものが19世紀の暗鬱な空気の中で海を越えてやってきた新規に隆盛したスピリティズムなどと結びついて仲間に死者を招き入れることになっていく。

さて、パラケルススもメスメルも19世紀の隠秘思想に大なる土台を与えたことは間違いないが彼らの理論は医術という実践を目的としていた。そうしたメスメリズムも当時のフランスのブルジョワサロンを囃し立てていたのは事実であるが19世紀になると頭を下げ、代わりに海を越えて交霊ブームがサロンで花形となっていくのであるが、とあるフランス人アラン・カルデックは熱心に交霊会に足を運び「事実確認」のデータを集め前述のスピリティズムの語を作り出し一冊の本を出版する。その著書 *Le livre des Esprit* において彼は霊との対話形式で靈魂の不死性について詳述するのであるが、彼はそこで人間を肉体、魂に分け、加えて第三の存在として « *périsprit* » という概念を作り出した。

« 93. L'Esprit, proprement dit, est-il à découvert, ou est-il, comme quelques-uns le prétendent, environné d'une substance quelconque ?

« L'Esprit est enveloppé d'une substance vaporeuse pour toi, mais encore bien grossière pour nous ; assez vaporeuse cependant pour pouvoir s'élever dans l'atmosphère et se transporter où il veut. »

Comme le germe d'un fruit est entouré du périsperme, de même l'Esprit proprement dit est environné d'une enveloppe que, par comparaison, on peut appeler périsprit.

94. Où l'Esprit puise-t-il son enveloppe semi-matérielle ?

« Dans le fluide universel de chaque globe. C'est pourquoi elle n'est pas la même dans tous les mondes ; en passant d'un monde à l'autre l'Esprit change d'enveloppe, comme vous changez de vêtement. »

— Ainsi quand les Esprits qui habitent des mondes supérieurs viennent parmi nous, ils prennent un périsprit plus grossier ?

« Il faut qu'ils se revêtent de votre matière ; nous l'avons dit.⁽¹⁾ »

このように三つめの要素である外的靈性は一種の物質的側面を含んだものとされており、これは前述した第一質料や空気の概念にかなり近い。事実ユイスマンスは『彼方』の中においてこの

造語とそれを生み出した張本人とパラケルススを混在させ記述している。

パラケルススからカルデックに至るまでこの第三の存在は空間を不断に満たし、組み合わせは異なってくるものの二者間で影響を相互的に与え得るものとして、また科学的根拠の置かれたものとしてカルデックの場合は些か精神的な色合いが強いものの文学作品の中でその役割を果たすことになる。

だいぶ回り道になってしまったが論をヴィリエの方に戻したい。彼は『クレール・ルノワール』にはもちろん『未来のイヴ』においても重要な役割を果たす存在としてこの神経流体を登場させているが、その目的はいかなる理由によっているのであろうか。

『クレール・ルノワール』において神経流体は常に死者を通して描かれ最終的には死んだルノワール博士の霊的活力が死の際にいるクレールの瞳孔に効果を及ぼすのであるが、流体と霊の力のオカルティスム的側面とその内容は幾つかの段階を経て展開していく。

« La puissance d'une imagination, d'un rêve, d'une vision, dépasse quelquefois les lois de la vie. La Peur, par exemple, l'idée seule de la Peur superstitieuse, sans motif extérieur, peut foudroyer un homme comme une pile électrique. Les choses vues par un visionnaire sont, au fond, matérielles pour lui à un degré aussi positif, tenez, — que le Soleil lui-même, cette lampe mystérieuse de tout ce système fantasmagorique de création, de disparition, de transformation !⁽²⁾ »

出発点は想像と観念、特にここでは恐怖といった強力な想念が流体的に及ぼす効果である。とりわけヴィリエは精神力の物質性の提唱、というよりもその性質そのものの効力に議論が飛躍していることは注目に値する。

また続けて博士は少女の肉体に観念が及ぼした実際的な創痕について実例を挙げて語るのだが、

« Appelez ceci comme vous le voudrez ; je demande en quoi l'ombre, l'idée, diffère décidément de ce que vous appelez la réalité sensible, si le simple reflet d'une sensation étrangère a le pouvoir de s'instiller, de s'infiltrer mortellement dans l'essence de notre corps. Quoi ! une ombre — qui n'est qu'une ombre — nous tue malgré cela ?... Réfléchissez.⁽³⁾ »

ここでもやはり可感的なものとしてその効力を強調することで実在性を演繹的に証明しようと試みているのであるが、段階的にこの物語を常に覆っている「死」のイマージュが浮き彫りになっていき神経流体は死者にとっても無関係ではなくなっていくのである。

さて同じように物語の中で一貫しているテーマは様々な議論による靈魂の不死の証明ではあるがそれこそがヴィリエの目的としたものであろうか？

カルデックはボノメ博士が挙げたリストの中に入っているのであるが、カルデック自身が創設

したスピリティズムのドグマは靈魂の不滅である。またヴィリエも登場人物に長々と講義をさせてはいるが、その目的は死者の力を生理学的に証明することによって同じように靈魂の不死性を強く訴えることにあったと考えるのが自然な帰結と言える、というのが一つの結論とも考えられるが今まで見てきたようにあくまでも影響力の方に論の重点が置かれていることにはなお疑問を置くべきである。その点ではヴィリエは数学者よりも化学者である。

その手がかりとしてルノワール博士は靈魂の不死性について一度だけ直接に言及している。

« La vraie question n'est donc pas de savoir si « l'âme est immortelle », puisque c'est d'une évidence qui ne se prouve pas plus qu'aucune autre. La question est de savoir de quelle nature peut être cette immortalité et si nous pouvons, d'ici-bas, influencer sur elle.⁽⁴⁾ »

『クレール・ルノワール』においてヴィリエは上記のような場合を除いて不死性そのものに対する証明を試みることはなく、あくまでも精神領域の場合においても「実証科学的」であることは興味深い。事実物語の最後を顕微鏡で死者の瞳孔に反射された「幻想」を確認してしまうポノメ博士で幕を閉めているのは無意味なことではないだろう。

« — Mais, — mais, — grondai-je en regardant de travers la morte, — il a fallu... qu'au mépris des vieux mensonges de l'Étendue et de la Durée... mensonges dont tout nous démontre, aujourd'hui, l'évidence... il a fallu que l'Apparition fût réellement extérieure, à tel impondérable degré quelconque, en un fluide vivant peut-être, pour se réfracter de la sorte sur tes voyantes prunelles !⁽⁵⁾ »

ここにおいて近代精神の代表者であるポノメ博士を皮肉的に用いることによって科学的に胡散臭い流体や死者の力を証明してしまうという手法をヴィリエは用いている。一つにはヴィリエの十八番である近代科学への蔑視と痛烈な一撃というものは無論あるが、このようにみるとヴィリエの哲学はなお科学精神によって縛られているような錯覚を受けるのも事実である。ヴィリエ自身ベックラール、ハーヴェイ、カバニスといった生理学者の引用が多く他の著作でも断頭台の実験や電気椅子、『未来のイヴ』はいうまでもないであろうがそうしたものに並々ならぬ関心を抱いていた。無論ドゥルーガルら多くのヴィリエ研究者が指摘する通りヴィリエの引用の粗雑さはかなり残ってはいるが、神学者の引用と比較して優劣をつけることはあまり意味はないだろう。

以上のようにヴィリエが科学的開拓精神に満ちた人物ではないことに論拠を与えるにはさらに続く階梯の上にある要素を見ることで条件は満たされうると考える。

3. ヘーゲリアンとミスティーク

さて、ではヴィリエはどのように生理学的オカルティスムからヘーゲル哲学を引き出してきたのであろうか？

« La Pensée étant donnée, la Mort est donnée par cela même ! » a dit le Titan de l'Esprit humain : et c'est cela seul qui peut prouver l'Immortalité. « Supprimez la Pensée, il restera des substances qui pourront tout au plus être éternelles, mais qui ne seront pas immortelles ; car la Mort ne commence que là où s'éteint et disparaît la Pensée. La Mort, créée par l'Esprit comme la Vie, relève de l'Esprit. » Et ce que nous appelons la Mort, n'est, en effet, que le moyen terme, ou, si vous préférez, la négation nécessaire, posée par l'Idée pour se développer jusqu'à l'Esprit, à travers la Pensée.⁽⁶⁾ »

上記のような接続では多少強引な印象もあるかもしれないがヴィリエにおいてヘーゲル哲学と神経流体をつなぐ鍵はやはり「死」である。人間が閉じられた肉体の中で行う思考行為とその中間地点である死、そして一種の到達点と呼んでもいいかもしれないが、カルデック的に言うならば霊体≡精神の三位一体が掲げられている。すなわちヴィリエは生成変化を絶えず続ける物質的宇宙を徹底的に批判し、代えて精神の絶対的優位を博士に語らせることにより精神を死のデミウルゴスとし屈服させ靈魂の不滅性へと論を接続させていると考えられる。

『クレール・ルノワール』を複雑にさせているのは流体や骨相学や死者の力などといったポータブルな恐怖小説の様相を帯びていると同時に断続的に唯心論じみた議論が挿入される点にあることは一つ留意したい。事実ヴィリエが引用し解釈しているヘーゲル哲学はヘーゲル本人のものとは変質し別の人物の引用をヘーゲル自身に当てはめたりなど多分に粗い部分も目立つ。この物語について論述したドゥルーガールはヴィリエのヘーゲル思想は忠実な信仰者であるヴェラが記したヘーゲル哲学導入書の引用である点を多く指摘している。

しかしヴィリエはこの中でルノワール博士に自身の文字通りの永遠不滅のテーマを引用でもって語らせるのみで終始させることは考えられない。そのために彼自身の主要な求道者としてクレールの存在を置いたのではあるまいか。

« En un mot, je suis, en tant que pensée, le miroir, la Réflexion, des lois universelles, ou, selon l'expression des théologiens, « je suis fait à l'image de Dieu ! » — Comprendre, c'est le reflet de créer.⁽⁷⁾ »

ルノワール博士はこのように自らの思考する精神を全宇宙も神も包括する存在として鎖から解き放たれたかのように所有しているように見えるが、その精神自体も実際には思考することによって自らを限定せざるを得ず、こうしたある種驕慢な神に対する思弁的アプローチはクレールによって弁証法的に批判されているところのものであるし事実ヴィリエは彼らにそうした役割を配して

いるのだ。

少し黒魔術的话题の方へ振り返ることになるがその点について引用してみる。

« — Je crois, du moins, — en dehors de tous vains sophismes dialectiques — répondit Lenoir, — que, par exemple, la force de Suggestions que peut exercer, — du fond de la ténèbre, — un défunt vindicatif sur un être vivant qui lui fut familier, — (auquel, par conséquent, le rattachent obscurément mille et mille fils invisibles), — oui, je crois, dis-je, que cette force de Suggestions peut, sur cet être, devenir oppressive, meurtrière, formidable, — matérielle, enfin — durant un temps indéterminé. Car il est des défunts vivaces ! en qui la Mort, elle-même, n'abolit pas immédiatement les sentiments et les passions.⁽⁸⁾ »

ここでルノワール博士は後々クレールに与えることになる自身の死後の霊的な魔力について繰り返し「信仰」していることを語っている。であるがそのすぐ後にクレールの信仰と比べて自身の哲学の陰惨さを反省している。ここでは可感世界が単純な思考によって鎧袖一触されてしまうという思想においては二人の信仰は共通の認識であるにも関わらず、である。事実博士はそうした階梯を登るのにクレールが持つ踏み切り台がないことを嘆いている。その手段こそがクレールの語る信仰なのである。ここにおいて突然変異したヘーゲル哲学は神という存在を介してヴィリエのカトリシズムへと手を握る。

4. 結びに

ここまでこの物語におけるヴィリエの枢軸たる哲学を下段の生理学的アプローチからカトリシズムに到達する過程を粗くではあるが観察してきた。しかしヴィリエのカトリシズムが単純に神への信仰という形で唯心論と説明付けるだけで終始するならばクレールは自らの言葉で語る役割を多く持つ必要はなかったであろう。

« — Quand je pense la Lumière, continua-t-elle, mon très-humble esprit coïncide avec ce qui fait que toute lumière peut se produire. — L'Esprit, en qui se résout toute notion comme toute essence, pénètre et se pénètre, irréductible, homogène, un. — Et, quand je pense la notion de Dieu, quand mon esprit réfléchit cette notion, j'en pénètre réellement l'essence, selon ma pensée ; je participe, enfin, de la nature même de Dieu, selon le degré qu'il révèle de sa notion en moi, Dieu étant l'être même et l'idéal de toutes pensées.⁽⁹⁾ »

クレールの語る神に抱く観念は出発点としての人間の意識が神の放つ光を反映し、その光によって自身が満たされる、そうした状態に置かれると脳の発散物としての意識は乖離し霊が上位世界へと上昇していく、それこそが魂が「増大」することである、というものである。

こうした思想はプロティノスに代表されフィチーノによってルネサンスの星幽曼荼羅にて開花したネオプラトニズム的思考に非常に似通っている。しかしヴィリエの神をヌースの神と同一視することは慎重にいかねばなるまい。

これからこの複雑な観念体系に立ち向かうにあたって主要な課題としてはそのヴィリエの最上位においた信仰の問題を、またその性質を見極めることにあるだろう。特にその神秘主義的側面、思惟から発して信仰の力を介して神を「観想」し合一にまで最終的に到達するその側面を無視することはできないだろう。

事実ヴィリエはクレールにこのように自身の最上位に位置する思想を代弁させてはいるのであるがこうした神秘思想をヴィリエがとりわけ好んで用いた理由は改めて検証してしかるべきだろう。敬虔なクリスチャンであるというヴィリエの本軸は常に念頭に置きつつ「靈魂の不死性」という物語本編における普遍観念をいかにして証明していくのかまだ課題は多い。

注

- (1) Allan Kardec, *Le Livre des Esprit*, Didier & Cie, Libraires-éditeurs, 1860, pp. 86-87.
- (2) Auguste de Villiers de L'Isle-Adam, *Tribulat Bonhomet*, P.-V. Stock, éditeur, 1908 (3e éd.), pp. 185-186.
- (3) *Ibid.*, pp. 185.
- (4) *Ibid.*
- (5) *Ibid.*, pp. 267.
- (6) *Ibid.*, pp. 190.
- (7) *Ibid.*, pp. 152.
- (8) *Ibid.*, pp. 192.
- (9) *Ibid.*, pp. 174.

参考文献

- ヴィリエ・ド・リラダン『トリビュラ・ボノメ』斎藤磯雄訳、三笠書房、1949。
パラケルスス『奇跡の医書』大槻真一郎訳、工作舎、1980
中井章子・本間邦雄・岡部雄三訳『キリスト教神秘主義著作集 第16巻』教文館、1993。
Auguste de Villiers de L'Isle-Adam, *Tribulat Bonhomet*, P.-V. Stock, éditeur, 1908 (3e éd.)
(https://fr.wikisource.org/wiki/Tribulat_Bonhomet).
- Joseph von Görres, *die christische Mystik BAND I*, AKADEMISCHE DRUCK- U. VERLAGSANSTALT, 1960.
Denis Diderot, *ŒUVRES COMPLÈTES de DIDOROT BELLES-LETTRES VI POÈSIE DIVERSES SCIENCES MATHÉMATIQUES PHYSIOLOGIES*
(<http://visualiseur.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k23396s>).
- Allan Kardec, *Le Livre des Esprit*, Didier & Cie, Libraires-éditeurs, 1860.

(https://fr.wikisource.org/wiki/Le_Livre_des_Esprits).

E. Drougard, *Les Trois Premiers Contes Claire Lenoir, L'Intersigne, L'Annonciateur TOME II*, Publications de la Faculté des Lettres d'Alger, 1931.

Léon Bloy, *La Résurrection de Villiers de l'Isle-Adam*, A. Blaizot, 1906,

(https://fr.wikisource.org/wiki/La_R%C3%A9surrection_de_Villiers_de_l'Isle-Adam).

Pierre-Georges Castex, *VILLIERS DE L'ISLE-ADAM 1838-1889*, Bibliothèque historique de la Ville de Paris, 1989.

Alan Raitt, *VILLIERS de L'ISLE-ADAM EXORCISTE DU RÉEL*, LIBRAIRIE JOSÉ CORTI, 1987.

